

# 救急？ 受診？ 子の急病時 どう判断

急に熱が出て、ぐったりしている。乳幼児の急病時に保護者はどうしたらいいのか。緊急度の目安となるポイントの一つは「全身状態」。京あらしんこども館(京都市子ども保健医療相談・事故防止センター)の長村敏生センター長は「保護者は普段から子どもの様子を見ており、いつもの状態と比較することで全身状態が評価できる」という。(稲庭篤)

## 京あらしんこども館で教室

### まず全身状態を見る

子どもの急病時の対応を学ぶ健康教室が同館(京都市中京区)で開かれ、長村センター長が観察ポイントと受診の目安について解説した。

乳幼児は自分の体調や症状を言葉で訴えることができません、不正確なこともあるが、「子どもは正直で我慢しない。うそもつかない。その時々体調が全身状態、体の動き、顔つき、意識レベル



乳幼児の急病時の対応について学んだ健康教室(京都市中京区・京あらしんこども館)

ルなどに正確に反映される」という。保護者に求められることは▽緊急を要する状態を見逃さない(必要時は早めに受診して重症化予防)▽緊急を要さない状態での不要な受診は避ける(子どもの安静を優先、医療資源を温存)。

自身が理事長を務める日本小児救急医学会の「急病時の子どもの見方と受診の目安のための問診票」の使い方を説明した。問診票の項目は12あり、項目ごとに冊子で詳しく解説している。

まず確認するのが「全身の状態」と「顔つき」。動かない、無表情で眉も動かさないなど緊急を要する状態なら、救急車を呼ぶ。全身状態は保護者が判断しやすい。京都第一赤十字病院小児科救急外来を受診した患者への調査によると、保護者が全身状態から緊急と判断した子どもは実際に入院する

## B 顔つき

Aの体の動き以外で全身状態がよく反映されるのは顔つきです。顔色や顔の表情など、顔を見ることは、判断に役立ちます。



②の赤くなる状態は、発熱で上がった熱を外に出すときが多いのですが、全身状態が悪くなる時に青白くなる前にもより赤くなることもあるので、④にならないか観察することが大事です。

嘔吐する前や車酔いなどで、顔色が一時的に青白くなる場合は、唇まで紫色になることは少なく、嘔吐や車酔いがおさまると顔色は回復します。

ぐったりしていて、時間が経っても顔色がよくなる場合は、血液の流れが悪くなっているか、体中の酸素不足の状態といった緊急事態を考慮して、すぐ受診あるいは救急車を呼んだ方がいいでしょう。

全身状態は顔の表情や目つきに表れやすいので、まず体の動きを観察したら、次は子どもの目を見て話そうにしてください。

「目は口ほどにものをいう」ということわざもあるように、子どもが苦しそうな表情をしていると感じる場合(③)は、②と④の中間の注意が必要な状態にあたります。

さらに全身状態が悪くなると、無表情で眉も動かさなくなり(⑤)、もしそういう状態になったら、救急車を呼んでください。



日本小児救急医学会のパンフレット「急病時の子どもの見方と受診の目安」より

下記の問診票をみて分からないことがあれば本文の内容をお読みください。

### 急病時の子どもの見方と受診の目安のための問診票

	①いつも通りにしている	②少し元気がない	③活気がない	④ぐったりしている	⑤動かない
A 全身の状態					
B 顔つき	①普段と変わらない	②ほおが赤くなっている	③苦しげである	④顔が青白く唇が紫色	⑤無表情で眉も動かさない
C 子どもとの会話	①普段通りにできる	②聞けば答えてくれる	③話したがらない	④呼びかけに応じない	⑤痛み刺激に応じない
D 呼吸状態	①普通に呼吸している	②いつもより呼吸が速い	③ゼイゼイヒューヒュー	④鼻がピクピクし肋骨の間が凹む	⑤あえぎながら呼吸する
E 睡眠状態	①ぐっすり眠れる	②時々目を覚ます	③少しの刺激で起きる	④苦しげでまったく寝ない	
F 食事摂取	①普段通り食べている	②少し食べている	③水分しか摂れない	④食べも飲みもしない	
G 嘔気や嘔吐	①嘔気や嘔吐はない	②嘔気が1~2回の嘔吐がある	③繰り返し嘔吐する	④血液を大量に嘔吐する	
H 排尿	①普段通り出ている	②少ないが出ている	③あまり出していない	④12時間以上出していない	
I 便の形状	①普通の便が出ている	②どろどろの便である	③水様で頻回になっている	④便全体に血液が混ざる	
J 痛みの程度	①痛みはない	②触ると痛い増強する	③動かすと痛がる	④痛くて我慢できない	
K 出血状況	①出血はない	②自然に止血している	③押さえたら止まる	④押さえ続ける必要がある	
L 皮膚の状態	①発疹は出していない	②痒みあり	③末梢冷感、蒼白	④チアノーゼ(青紫色)が見られる	

- 1回目(午前・午後 時 分)を黒字でご記入ください。
- 2回目(午前・午後 時 分)を赤字でご記入ください。目安として5時間後
- 3回目(午前・午後 時 分)を青字でお願いします。目安として10時間後

#### 受診の目安

- (1) 各項目の評価に④が1つでもあれば救急車を呼ぶ。
- (2) ③以上が1つでもあれば受診の方がよい。
- (1)(2)に当てはまらない場合は、数時間ごとに繰り返し確認しましょう。
- (3) ③以上が1つでも増えれば急いで受診する。2つ以上増えれば救急車を呼ぶ。
- (4) ②が新たに増えるが、持続する場合は受診の方がよい。

率が高く、顔つきや会話、呼吸状態の判断でも同様だった。「いつもと違う」「評価基準となる普段の状態を知るためには、口頃から子どもの動きを追って、しっかりと見守ることが重要になる。」「子どもの行動範囲は結構広い」。公園でさまざまな遊具を回って遊ぶ画像を示し、体調が悪いときとの落差が大きいことを説明した。「いつもと違うと感じるためには普段の様子をよく見ておくことが大切。理屈ではない違和感、『何かいつもと違う』と感じる感覚が大事」とアドバイスした。

乳幼児の病気は症状が急変しやすく、急に回復することもあれば、急に悪化することもある。「時間経過とともに全身状態がどう変化していったかを観察すると緊急度の確に評価できる」。必要のないに救急車を呼ぶことが社会問題になっているが、乳幼児については手遅れにならないようにすることが保護者に求められる。「急病時に家庭で子どもを見守ることは『何もしていない』ことと同じではない」と観察することの大切さを強調。「保護者にとつてより重要なことは、子どもの病気を診断することではなく、病院に行った方がよいかどうか、緊急度を判断すること。一つ一つの症状にとらわれず、全身状態をみるのが大事」と繰り返した。

問診票は、受診時の医師への説明にも役立ち、事前の入手と急病時の利用を呼びかけた。

急病時の子どもの見方と受診の目安のための問診票(いずれも京あらしんこども館のホームページ「保護者のみなさまへ」からダウンロードできる)